

48 『盲聾記』の記事から

— 戦国時代の医師の日記

水谷 惟紗久

『盲聾記』は、戦国時代のなかば永正一七年(一五二〇)に、医師丹波保長によって書かれた日記である。自筆原本は、前田育徳会尊経閣に残されており、文科大学史誌叢書の一つとして刊行されている。

中世の医師による日記はめずらしく、当時の丹波氏・半井氏の動向、医療のありかたを知る上で貴重な史料といえる。本報告においては、この『盲聾記』の記事から永正年間当時の丹波氏・半井氏について読み解くこととする。

中世以前の日記は、記主自身の備忘のためばかりでなく、その属する集団の故実として他者に読ませる前提で作成されるものが大半である。『盲聾記』には、殊にその性格が明確で、日記の表題の由来を記した正月五日条の

記事や、自分の家族について「予カ弟」「予カ妹」などと示す二月二十八日条ほかの記事からそれがうかがえる。

他者に読ませることを前提としたものならば、その伝えるべきものはなにか。日記全体の内容は、当時の京都の社会情勢など多岐にわたるものであるが、親等の近い家族を、わざわざ「父」「弟」と記しているところからみて、伝えるべきことからの重要な一つに自身の家族の血縁があるものと思われる。

丹波保長は、丹波重長からの直系を叔父、丹波利長の出家にともない継承した人物である。そして『尊卑分脈』には、「從五上、兵庫頭、早世」とあり、彼の死によってこの一流は絶えている。このころ、半井氏もその正確は絶え、四月二十九日条に「予カ老父(宗鑑)」とある宗鑑、半井明重は丹波氏から出て半井氏を継いだ人物であり、その跡を継いだ、半井明孝は丹波保長の兄にあたる。

戦国末期までには、丹波氏、半井氏ともにその正確の血縁は断絶しているようである。『言繼卿記』永録九年(一五六〇)九月二十三日条によれば、記主山科言繼が医書『周監方』を筆写した際、これが丹波重長、盛長の日

記の抄出であるとして、いるにもかかわらずこれを、「和家之骨髓」と評価しており、両氏の区別についての混同がみられる。これは言継自身の誤認によるものではなく、実際に養子関係や子孫の断絶などにより、両氏の間が混乱していたためと考えられる。

半井氏の系譜上、明重の養子となり近世までつづく半井氏の祖とされる明澄については『盲聾記』は全く記していない。明重嫡男の明孝の正嫡は明名である。その後の嫡流と思しき人物は天正三年（一五七五）の明雅まで降りうるが、彼自身の医師としての活動の記録は管見の限り確認できない。明孝からの半井嫡流は、新たに興った猶子系の明澄、明英という半井氏の隆盛とは、あまり関係なく没落の道をたどったものと思われる。

三月二十六日条ほかの記事から、保長を含む明重の一家が、越前一重谷と深いつながりを持っていたことがわかる。当時、明重は越前におり、そのまま客死して、嫡子明孝も、嫡孫明名も従三位まで上りながら、そのまま在国内、すなわち地方下向のままとなっているのが『公卿補任』により知られる。戦国時代の公家たちが、地方

に下向していくのはめずらしいことではないが、このように連続して地方へ下る過程を経て、京都とのつながりが希薄になることが、家自体の衰退をまねいたのではないかと考えられる。六月八日条には、丹波の別流であった千本左馬頭が奥州から上洛した記事がある。彼は千本盛直であり、やはり在国中に客死して、その結果この一流も絶えている。

『盲聾記』記主の丹波保長は、衰退に向かう一族に属していた。彼は、これが書かれて数年も経ずして早世したようである。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所／日本古文書学会会員）